

小学校社会科における「批判的な希望」を目指す授業の検討 —小学校第4学年「飲料水の供給」についての授業実践を事例として—

社会系サブプログラム

小林 陸久

【指導教員】 宮崎 文典 小貫 篤 中川 律

【キーワード】 小学校社会科 授業実践 社会認識 希望

1. 課題設定

本研究の目的は、児童生徒が今生活している社会に対して「希望」を持ち、かつその希望を持って社会について考え、自分で行動できるような力を、社会科の授業を通してどのように身につけさせるかを検討していくことである。

具体的には、小学校社会科の授業において、子どもが今自分たちが生活している社会やそこに存在している問題に対して、「変えられる」という意識や「変えていきたい」というような意欲を持たせるような授業や、その意欲を持って社会にある問題について考えたり、そこからその問題に対して行動することに繋げていったりするような授業を、どのようにして行っていくかを、この研究を通して検討していきたい。

日本財団が2019年9月下旬から10月上旬にかけて、インド、インドネシア、韓国、ベトナム、中国、イギリス、アメリカ、ドイツと日本の若者各1,000人を対象に行った「18歳意識調査」¹の結果によると、日本は、自分の国の将来について「良くなる」と答えた人の割合は9.6%で9カ国中最下位となっており、「悪くなる」と答えた人の割合は37.9%でイギリスに次いで2位となっている。また「変わらない」と答えた人は20.5%、「どうなるか分からない」は32.0%と、両者とも9カ国中最多となっている。この結果から、日本の若者は将来に対してあまり希望を持っておらず、自国の将来の展望を持っていない状況にある、ということがわかる。

加えて、こども家庭庁が、日本、アメリカ、ドイツ、フランス、スウェーデンの5カ国の13歳から29歳の男女各1000人を対象に行った「我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査（令和5年度版）」²によると、「社会をよりよくするため、私は社会における問題の解決に関わりたい」、「将来の国や地域の担い手として積極的に政策決定に参加したい」の項目に対して、「そうは思わない」と答えた人の割合が調査対象の5カ国の中で最も高く、「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」の項目で「そう思わない」と答えた人の割合も5カ国の中で最も高いという結果であった。

以上の結果から、自国の未来に対して希望や将来の展望をあまり持っていないのと同時に、自国の将来のために何か行動を起こす意欲や、自分が行動することによって何かが変わるかもしれないといった希望もあまり持っておら

ず、若年層の中に将来や自国に対する一種の諦めが存在していることが考えられる。そのため、社会に出て一人の市民として行動する前段階である学校教育において、社会に対して希望を持ち行動できるような力を養成することが、この国の公民として生きていくために重要ではないか、と考える。

2. 希望と小学校社会科の関わり

小学校学習指導要領（平成29年告示）によると、小学校の社会科においては以下のような目標が設定されている。³

社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。

(1) 地域や我が国の国土の地理的環境、現代社会の仕組みや働き、地域や我が国の歴史や伝統と文化を通して社会生活について理解するとともに、様々な資料や調査活動を通して情報を適切に調べまとめる技能を身に付けるようにする。

(2) 社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりする力、考えたことや選択・判断したことを適切に表現する力を養う。

(3) 社会的事象について、よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚、我が国の国土と歴史に対する愛情、我が国の将来を担う国民としての自覚、世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さについての自覚などを養う。

このように小学校の社会科では、これからの社会で主体的に生きる、平和で民主的な国家及び社会の形成者である一人の市民として、社会に貢献していくための能力を育成することが求められている。社会に貢献するためには、自分のできることは何かを考え、行動していくことが必要である。

特に社会科の目標の(2)、(3)に、その傾向が強く見られ

る。(2)では、今の社会で起きていることについて考え、その中から解決すべき課題を見出し、その解決に向けて自分に何ができるかを検討し行動する力を身につけることが述べられている。また(3)では、今ある社会をより良いものしていくために、積極的に社会に関わり行動していく態度を養成し、地域や日本、そして国際社会を形成していく一員であることを自覚させていくべきであることが述べられている。

しかし先に述べたように、日本の若年層は、自国や自分の将来に対する希望や展望をあまり持っていないことが多く、それと同時に自国の将来のために何か行動を起こす意欲や、自分が行動することによって何かが変わるかもしれないといった希望も持っていない、ということが調査の結果明らかになっている。

社会にある問題について認識し、その解決のためにどのように行動していくべきかを考え、それを実際に行動に移すことができる力を身につけさせるためには、現状の若年層の意識を変えていく必要があると考える。このようなことができるようにしていくためには、将来に対して希望や展望を持たせ、自分の力によって社会を変えることができるという希望を育てていくことが必要である、と考える。

「社会科」は文字通り社会の事象や課題について考え、関わっていく教科であるからこそ、学校教育段階で将来や自分に対して希望を持つことができるような教育を行っていくことが必要である。

3. 「希望」とは：フレイレの議論を手がかりに

ここまで、日本の若者には自分や自国に対する希望という意識が海外と比較してもあまりなく、教育、特に社会科教育によってそれを身につけさせ、社会の形成者として行動できるような力を育てていくべきである、ということを書いてきた。

ここで、そもそも「希望」とは何か、ということについて考えてみたい。一般的に「希望」と言えば、「あることの実現をのぞみ願うこと」という意味や、「将来に対する期待。また、明るい見通し」という意味で表現される。このような意味を踏まえつつも、本研究では暫定的に、希望を「今現実にある課題や現実そのものに対して、それを変えたい・変えられると考えることができるマインド」と位置付けることとしたい。以下では、このように考える根拠を、教育学者のパウロ・フレイレ (2001) の議論に即して述べていく。

希望と社会の変革のための行動との関連について、フレイレは以下のように述べている。

ぼくは一方で、なんらかの形で具体的に発現している絶望を否認することはできないし、それをそうあらしめている歴史的・経済的・社会的な根拠に目を塞ごうとも思わない。それでもなお、ぼくは、希望と夢を抜きにして、人間の存在を理解することはできないのである。希望というものを抜きにしたら、よりよく生きようとするとする

人間の不断のたたかいは、理解できないものになってしまう。希望は人間の存在論的な必要条件なのだ。絶望、すなわち行方を失った希望は、この必要条件にゆがみが生じている、ということなのだ。絶望がプログラムとなれば、われわれは行動するバネを失って、宿命論に屈従することになる。さまざまな力を結集してつくりなおすためにたたかうことは、もう不可能になってしまう。⁴

ここで言われている「たたかい」は、「社会と変えようとするための行動」という言葉に言い換えることができる。フレイレは、現実決して希望にあふれたものばかりではなく、多種多様な問題が存在していることは否めないとしつつも、将来への希望なしではそもそも何もなすことができないとしている。絶望の状態に陥っている状況では、自分の力に対する無力感を抱き、自分の力で行動していこうとする意欲すら失ってしまう。そうなると、今ある社会や現実をより良くするために行動したり、力を合わせて新しい道を作り出したりすることができなくなってしまう。そうならないためにも、現実を変えたいという意欲や、自分の力で何かを変えることができるという意識を持たせることが、社会の問題を考え解決のために行動するために必要である、とフレイレは述べている。

しかし希望を持って行動することは、「希望だけで世界を変えることができる」と考え思慮無しに突き進んでいくこととは異なる。この点についてフレイレは次のように述べている。

希望を重要視するとはいえ、ぼくは、希望がそのまま現実を変える力になるなどと言うつもりはない。所与の具体的・物質的条件などはお構いなしに、信ずる希望だけを頼りに猪突猛進するとすれば、それは妄動だ。希望は必要条件だが、十分条件ではない。希望だけでは、たたかいに勝てない。だが希望がなければ、たたかう士気は萎えて、ぼくらの足下はふらついたものになってしまうだろう。ぼくらが批判的な希望を必要とするのは、さかなが濁りのない水を必要としているようなものだ。⁵

フレイレは何か行動するにあたって希望は必要であるとしつつも、その希望だけを頼りにして闇雲に行動することを否定している。このことは引用の「信ずる希望だけを頼りに猪突猛進するとすれば、それは妄動だ。」という部分からわかるだろう。社会の課題を解決・変革する行動のために必要な希望とは、「批判的な希望」である。では批判的な希望とは何か。それは今我々が生きている社会で何が起きていて何が課題としてあるかを批判的に把握し、自分は何をしたいかや自分にできることは何かを考えた上で抱くべき希望である。今社会で何が起きているかを把握した上で、社会のどのような点を変えていきたいかのビジョンを自分の中で形作っていくことが、希望の実現のための行動において重要である。現状を批判的に見ることを通して、自分の意志

を確固たるものとして行動をしていくこと、これこそがフレイレの言う「批判的な希望」であり、それを持って行動することが、妄動的な行動に陥らないために必要なことである。

教育を行っていく中で持たせていくべき希望は、今現実にある課題や現実そのものに対して、それを変えたい・変えられると考えることができるような希望であり、その希望がただの願望で終わらず、実際に行動の段階にまで至りうるものとするためには、現実を批判的に見る目を養うことが重要である。

4. 批判的な社会認識について

希望を持って行動に向かわせ、かつその行動がただの無鉄砲なものにならないためには「批判的な希望」を持つことが必要である、と前節述べた。そしてそのような希望を持つためには、現実または社会の課題について考え行動する前段階として、今社会で何が起き、課題として存在しているかを把握した上で、その解決や変革のためにどう行動するかを自分の中で形作っていくことが求められることも、前項で述べた。この批判的に現実を見るということについても少し考えていく。

まずは現状の社会の認識をすることによって、子どもの理解や社会を見る視野がどのようになるか、フレイレの言説をもとに考える。

人びとの世界の見方は、具体的な現実そのものによって条件づけられており、ある程度まで、前者は後者によって説明される。具体的な現実が変われば、そのことをとおして、世界の見方も変わっていくだろう。しかしさらにまた、(認識行為をとおして)現実が暴きだされていき、自分のこれまでの世界の見方を規定していた諸要因が見えてくると、そのことによって世界の捉え方は変化し始めるものだ。⁶

現実の社会が変化していけば、個人の価値観や考えは変容する。しかしそれだけではなく、今の現実社会のあり方を認識することによって、個人の見える社会が広がり、社会の見え方が変化する、とフレイレはしている。社会の現状を知っていく中で、自分の社会に対する見方を規定しているものが何か気づくことができる。社会問題について考えていくうちに、なぜ自分がそれを問題と感じているのか、という点に気づいていくことによって、社会やそこにある諸問題についての考え方がより深まっていくことになる。社会の現状を知り、その上で変えていきたいという意識を持ち、さらには行動に向かうためにも、現状の社会の様々な側面を知り社会を認識し、なぜその問題の所在を明確にしていく。認識することによって初めて、課題が見えてくる。その上で自分が社会に対して、どのように関わり行動していくかを考えることが必要である。

次に批判的な社会認識を行い、社会問題を発見していく

ことを、どのように授業に落とし込んでいくかについて考えることとする。この段階は、子どもが「現状を変えたい・変えられる」という希望を持つ前の第一段階である。授業での批判的な社会認識について、池野範男(1999)は、自身が行った授業実践をもとに以下のように述べている。

第一段階は既存の制度、しくみやシステムに対し疑問視させる。それらの社会的な根拠を問いただし、根拠づけることがむずかしいことを明らかにし、日常あたりまえのように考えていることを批判できる回路に導く。⁷

我々が普段当たり前と捉えて特に考えない事象に対して、「その事象がなぜ当たり前となっているのか」「その事象とはそもそもどういうものなのか」という疑問のように、当たり前として受け入れられているものをあえて問い直すべきである、と池野は述べている。社会の諸事象の意義やその根拠について考え述べることは、いざ考えてみると難しいことである。このようなことを行い、子どもの中に問題意識を醸成させ、社会問題について考えさせるようにする。

社会にある事象についての知識や概念を獲得することと同時に、社会の現状を知り批判的に考えることを通して、解決・変革されるべき問題を発見し、それをどのように解決していくかを考えていくことが、批判的な社会認識を行うにあたって重要なことであると考えられる。

5. 先行実践の検討、考察

(1) 先行実践の検討

社会の現状把握を通して、解決・変革されるべき問題を発見し、それをどのように解決していくかを考えていくという、唐木清志の提唱する「社会参画」の視点を取り入れた授業実践は小学校社会科の中でも多く見ることができる。唐木は、子どもに社会について考察させ、どのように社会に対して行動していくかを考えさせる授業方法を、「社会参画型授業」とした。この形態の授業は、①問題把握、②問題分析、③意思決定、④提案・参加の四段階から構成されており、①②で社会的事象に関する理解や、それにまつわる基礎的・基本的な知識を獲得する。③では、得た知識をもとにして、どのように社会問題を解決していくかを意思決定し、④で社会参加を行い、社会に対して提案をしていく⁸。この理論は、私の考える「『変えられる』という意識や『変えていきたい』というような意欲を持たせるような授業」を検討していく上で、一つ重要な視座を与えてくれるものである。

しかしこのような形式の社会科の授業については多く先行実践が見られるものの、具体的に社会を批判的に把握するということや、今現実にある課題や現実そのものに対して、それを変えたい・変えられると考えるため力である「希望」を取り入れた小学校社会科の授業実践はあまり多く見られず、今回私が実践しようと考えている小学校第4学年での「人々の健康や生活環境を支える事業」についての実践でも、いくつか見られるものの多くないのが現状である。

吉元 (2008) は、社会機能を批判することを通して、現状の社会機能の問題を見つけさせ、どのような社会システムが良いかを考え、子どもの社会的判断力の育成を目的とした授業を実践した。⁹ 具体的には小学校第4学年のごみ処理場についての授業で、3つの段階に授業が分けられている。第1段階として、現状のごみ処理の仕組みやその社会的な意義を認識させ、ごみを処理するという機能の必要性について検討する。第2段階では、ごみ処理のための資金が私たちの税金から賄われていることや、一般の産廃業者の場合を考えることを通して、公共事業として行う意義を確認する。第3段階では、これからのゴミ処理機能のあり方について考えていく。この授業実践は、現在の社会のあり方を把握する活動が、授業の中にとっても丁寧に盛り込まれており、そこから見えてくる課題について考えるということも行われている。しかしそこから子どもたちに希望を持たせるような内容が授業の中に位置付けられていない。

澁谷 (2020) は、「未来洞察」という概念を用いながら、子どもたちが主体的に社会に対して行動できるような力を養成するための授業を実践した。¹⁰ 未来洞察とは、「不確定な要素に着目し、現時点では起こる確率は低いかもしれないが、望ましい未来を描き出し、その未来に到達するために何をすべきなのかを考えさせる授業設計である」という、イギリスのヒックスが提唱した授業の手法である。この手法を、澁谷は小学校社会科の水道水についての授業で用いた。具体的な授業の流れとしては、水道水の供給の仕組みや、供給システムの維持のような水道水の供給にまつわる社会的課題について学習したのち、このままいくと起こる可能性が高い将来と自分たちが考える希望の将来を考えさせる。この澁谷の授業実践は、社会の現状把握・考察を通して、解決・変革されるべき問題を発見し、それらを希望を持ってどのように解決していくかを考えていくという、私の行いたい授業実践に近いものである。しかし、この澁谷の実践では、供給の仕組みを理解させるための授業があまり丁寧に行われておらず、課題について考えたり、理想の社会を考えたりするのに必要な前提知識が獲得できず、子どもによっては自分の理想の社会を考えるとところまで行かないのではないかと、私は考える。

末永 (2021) は、合意形成能力の育成のために、実際にあった社会問題において、どのようにそれが合意形成に至ったのかを分析する、という授業を開発した。¹¹ 兵庫県高砂市の広域廃棄物処理場の建設の問題で、どのようにそれに関わった人々が合意形成を行ったかを見る、という授業内容である。この授業実践においては、発展的な内容を学習する前の、ごみ処理の仕組みについての学習を丁寧に行うことによって、児童の「なぜ？」を引き出し、この現状で良いのかという批判的な視点で見ることを可能にしている。

(2) 先行実践から得られた知見

これらの先行研究を検討・考察を行って得た知見としては、まずは課題について考えたり、そこから先の希望を持っ

てどう解決していくかを検討したりする前段階の、現状の社会の仕組みの把握や、批判的に現状を見るための授業をしっかりと単元計画の中に盛り込んでいくべきである、という点である。どの実践にも見られたことであるが、社会の現状について批判的に考えさせたいならば、その前の仕組みや現状についての学習をしっかりと行うべきである。

次に「未来洞察」の理論を、社会科の授業に活かしていくということである。現状ある問題を把握させた上で、どのような社会になれば理想であるかを考えさせ、その理想の社会に至るためにはどのようなことが必要であり、私たちはどのような行動を行っていくべきであるかを考えさせる。将来の社会について希望を持たせることによって、今現実にある課題や現実そのものに対して、それを変えたい・変えられると考えることができるようにしたい。

しかしここで問題となってくるのは、授業時数との兼ね合いである。限られた授業時数の中で、問題を把握させるために、現状の社会の仕組みを把握させる授業を丁寧に行おうとすると、問題を発見させた先の活動の時間を取ることができなくなる。ただ小学校4年生という発達段階も相まって、現状を把握する「社会認識」の段階を疎かにしてはできない。そのため今回の私の授業実践では、特に希望を持たせていくための第1段階である、現状の社会認識に重きを置いた授業を考えていくこととする。

6. 授業開発の方向性

今回私が行った授業では、小学校第4学年小学校学習指導要領(平成29年告示)第4学年社会2内容(2)の、「人々の健康や生活環境を整える事業」の分野を取り扱った。¹² 今回の授業実践では、「飲料水、電気、ガスを供給する事業」と、「廃棄物を処理する事業」の2つの小単元のうちの、ライフラインの供給について学習を行い、特に水道水の供給の授業を行なっていった。

単元の開発を行うにあたっての方向性としては、前節でも述べたように、現状の社会認識に重きを置いた授業である。今回の単元である水道水の供給の分野で、認識させるべき社会の現状としては、水道水の供給の仕組みの他に、水道水の供給にまつわる社会的課題が含まれる。

社会的課題の把握まで現状の社会認識に含める意義としては、現状の水道水の供給の仕組みを理解した上で、その仕組みから課題を見出していくことが重要である、と考えているからだ。第4節で確認したように、フレイレによれば、社会にある問題について変えていきたいという意識を持ち、その意識に応じた行動に向かうためには、現状の社会の様々な側面を知り社会を認識し、その問題の所在を明確にすることが必要である。そのため、今回の単元であれば、供給の仕組みを学習した上で、現在の仕組みから見えてくる問題(今回の実践では水道管の老朽化についての問題を取り上げた)も認識していく必要がある。今回の授業実践では、この段階に重点を置いて行った。

この単元で認識すべき社会の事象としては、「水道の供給

の仕組み」と、「現状の仕組みによって起きている問題」の2つが挙げられる。仕組みについては、さいたま市の供給経路を見ていくものとする（実際に実践した小学校がさいたま市内の学校であるため）。

ここで重点を置いたこととしては、「安全な水道水が安定供給されるべきである」ということをテーマにしなが、各水道施設の役割を調べさせることによって、安全な水道水の安定的な供給が私たちの健康的な生活を支えているということを理解させたことである。

またただ経路を追って仕組みを調べるのではなく、そこに人が多く関わっていることを理解させることに努めた。様々な局面で、様々な人が関わっていることを理解することによって、社会が様々な人の協力によって成り立っているという、現状の社会のあり方の認識に寄与すると考えた。

起きている問題としては、水道管の老朽化問題を取り上げた。この問題を取り上げた理由は、次の2点である。

1点目は、水道管の老朽化が、他の社会問題と密接に関わっていることである。老朽化した水道管の修繕のコストは、自治体の財政から賄われている。しかし、少子高齢化に伴う人口減少による税収減などから、財政難に陥っている自治体が少なくない。そのため水道管の修繕や交換などの工事が満足に行えていないことが、日本全体の問題として挙げられる。このように、水道管の老朽化が起きている背景には、少子高齢化やそれにまつわる自治体の財政難といった、他の（より大きな）社会問題が存在している。そこで、水道の供給についての問題を見ることを通して、より広い範囲の問題にも目を向けさせるようにすることが目的である。

2点目は、水道管の老朽化による事故が最近、近隣の八潮市で起きたことから、この問題がさいたま市に住む子どもにとって、身近で現実的な問題として捉えやすいと考えられることである。

なお今回の授業実践では、「水道水の供給についての理想の社会を考える」ということを、限られた時間の中で考えさせることは困難であると判断したため、実際の授業では、社会にある課題を把握した上で、どのような社会が理想であるかを考える段階まで行うことができなかった。この部分に関しては今後の課題として後述する。

7. 単元計画と授業実践の展開

前節で確認した授業開発の方向性に即して、水道水の供給について以下のような単元を計画した。

第1次	「水道水の供給の仕組み」
第1時	○普段自分たちがどのくらいの水を使っているのかを知る。 ○水道が現在ほど整備されていない時代では、どのように水は供給されていたのかを考える。
第2時	○学習問題に対する予想を考える。 ・学習問題

	「安全な水が安定して送られるために、どのようなことが行われているのだろうか」
第3時	○配水場についての学習を行う。 ・配水場の役割 ・さいたま市の配水場の位置の確認
第4時	○浄水場についての学習を行う。 ・浄水場の役割 ・浄水の仕組みの理解 ・さいたま市の浄水場の場所の確認
第5時	○大久保浄水場に注目して、前時の授業の内容を深める。 ・大久保浄水場での浄水の仕組み ・大久保浄水場の職員の話 ○水道水が安全でない場合、どのような影響が起こるかを考える。
第6時	○ダムについての学習を行う。 ・埼玉県の水のダムと所在の確認 ・ダムの役割
第7時	○ここまでの学習をまとめ、学習問題に対する結論を考える。 ・それぞれの水道施設の、水の安定的・安全な供給のための役割をまとめる。 ・安定的で安全な水道供給には、多くの人の協力が欠かせないことをまとめる。
第2次	「社会問題の把握」
第8時	○八潮市で起きた水道管の破裂事故から、水道管の老朽化について考える。 ・全国とさいたま市の、現状での水道管の老朽化状況を把握する。 ・水道管の老朽化による生活や社会への影響を調べる。 ・水道管の老朽化が起きている原因を把握し、老朽化の問題がより大きな社会問題と関連していることを理解する。

まずはこの単元全体の流れを確認していくと、第1時が導入の授業であり、第2時から第7時が各水道施設の役割や働きを調べて、現状の水道水の供給の仕組みを把握する授業である。そして第8時が水道管の老朽化を例に挙げながら、現状の水道水の供給をめぐる社会問題について考えていく授業である。

導入の授業では、水道と私たちの生活が密接に関わっていることを理解させ、水道によって私たちの現在の生活が成り立っていることを確認する。

水道施設についての授業では、それぞれの水道施設について、「安全な水道水を送るため」と「安定的に水道水を送るため」の2つの視点から調べさせ、それぞれの役割について確認させた。それと同時に、機械だけでなく様々な人の協力によって現状の水道水の供給が成り立っていることも

把握させた。またこれらのことを調べさせたり把握させたりしながら、安定的に水が供給されなかったり、供給される水が安全でなかったりした場合、自分たちの生活にどのような影響が起きるかを考えさせ、水道水が安全かつ安定的に供給されるべき意義について考えさせた。今回授業で取り上げた水道施設は、主に水源林、ダム、浄水場（大久保浄水場）、配水場の4箇所である。

社会問題の把握についての授業では、八潮市での水道管の破裂事故が水道管の老朽化に起因することを確認して、現状どのくらい全国・埼玉県で水道管が老朽化しているのかを見ていく。その後老朽化することによる社会や自分たちの生活への影響や、老朽化した水道管が年々増加している原因について調べさせた。この問題については、前回までの授業で得た、「安全な水が安定的に供給されることによって、生活や社会が成り立っている」という概念に照らし合わせながら考えさせた。

このような授業の流れで、現状における水道水の供給の仕組みに関する社会のあり方について把握し、そこで把握したことをもとにして水の供給をめぐる社会問題について考えさせる。それにより、社会にある問題について、それを変えていきたいという意識を持ち、その意識に応じた行動に向かえるようにするための最初の足掛かりを作ることを目指した。

8. 実際の授業の様子と考察

(1) 授業の様子

ここでは、授業を実践した際の様子や、授業中の児童の反応について述べていく。

第1時の導入の授業で、児童に自分の生活の中でどのくらい水を使っているのかを予想させた。その後子どもたちが予想した水量よりも多い水量が、実際の生活の中で使われていることを知った際には、かなり子どもが驚いているように見受けられ、普段の自分たちの生活と水が密接に関係していることを再認識していた。

第2時の授業では、「安全な水が安定して送られるために、どのようなことが行われているのだろうか」という学習問題を立て、どのようにして私たちの元へ水道水が送られているのかを予想した。ここで立てた予想としては、「山やダムから来た水が川に行き、川の水が浄水場へ送られ、浄水場で綺麗になった水が、配水場で送られ、最後に私たちの元へ水が送られてくる」という予想がたてられた（写真1）。各班に水道施設の写真のカードを配り、それらを並び替えながら予想していたが、多くの班が実際の順番通りに並び替えられていた。

第3時から第6時の授業までの授業で、それぞれの水道施設についての学習を行い、どのようにして水道水が作られ、自分たちのところへ送られているのかを調べた。すでに各施設の役割について知っている児童もいた。しかし「安全」と「安定」という水道水の供給における重要な概念まで理解している児童はあまりおらず、学習の中でこれらの概

念について子どもたちは理解を深めていった。



写真1 水道の経路の予想例

そして第7時の授業では、ここまで学習したことをまとめ、学習問題に対する自分の結論を作った。この結論では、図2のような記述が提出された。

ダムや浄水場、配水場のしせつが、安全で安定な水を送りだしている。また、機かいだけではなく、たくさんの人たちが、安全で安定した水を送るために協力していることがわかりました。

図1 学習問題に対する結論の記入例（原文ママ）

多くの子どもが図1の記入例のように、各水道施設が水の安全・安定供給のための役割を担っていることと、それぞれの施設では、様々な人も水道水の供給に強く関わっていることの2点について触れて結論を導き出していた。

第8時では、水道水の供給における社会問題についての学習を行っていった。題材となった、八潮市でも水道管の破裂事故については、自分の身近で起きていたことや、連日頻りに報道で取り上げられていたことも相まって、やはりほとんどの児童が知っており、とても関心を寄せていた。老朽化による影響を調べていく際にも、この事故によってとても理解しやすくなっていた印象があった。現状における水道管の老朽化の進行状況を見る際には、2011年と2021年の状況を比較して見ていったが、10年間で全国的に急激に進んでいることを知り、「すごく進んでいる!」「ここまでとは思っていなかった!」というような反応が見受けられた。水道管の老朽化が全国的に進んでしまっている原因について考えていく際には、古い水道管が交換されずに放置されてしまったり、修繕が追いついていなかったりしていることが原因である、ということは多くの児童が考えられていた。しかしそうしたことが起きてしまっている背景には、少子高齢化やそれにまつわる自治体の財政難といった、他の（より大きな）社会問題が存在していることまでは中々理解が及んでおらず、教員側から問いかけを行いながら把握していった。この授業の振り返りでは、図2のような記述

が見られた。

「ろうきゅう化」という小さな問題でも断水や水もれ、水質悪化、はそんな事故や、しゅうりにものすごい税金がかかるなどたくさんのデメリット（えいきょう）がある。そして安定供給や安全性がなくなり、生活がなりたたなくなってしまう。

図2 第8時振り返りの記入例（原文ママ）

振り返りを書かせた結果、多くの児童は、水道管の老朽化による影響は書くことができていた。しかし、図2のこの児童のように、全国の水道管の修繕・交換に多くの税金が使われるといった、より大きな社会問題が背景にあることも記述できた児童は、あまりいなかった。この点については、考察の項にてより深く考えていきたい。

（2）授業実践の考察

以上の授業実践の結果から、「社会の仕組みの認識」と、「社会問題の把握」についてどの程度達成できたかをより詳しく検討し、「批判的な社会認識」のスキルを身につけることができたか、について考えていく。

今回の授業の後、児童が、授業を通して何を新しく学んだと認識しているかを見るために、「今回の授業を受ける前と後で、考え方が変わった点があれば教えてください。」という旨の質問を行った。回答の中で多かったものは、「いろいろな人たちが協力して安全な水が安定して送られていることが分かった。」（原文ママ）という回答のように、水道水が安全・安定供給されていることに注目した回答である。この回答や、図1の振り返りの記入例に見られることは、水道水の供給において「安全・安定」と「様々な人の関わり」という概念を新たに児童は認識したということである。このように、現状の水道水の供給における社会の仕組みの認識については、一定程度達成できたとと言えるだろう。

また「いつも当たり前のように飲んでいて、水について調べて水の大事さを感じました。」（原文ママ）ということも、授業後の質問に書いていた児童も見られた。この回答から、現状の仕組みを認識した上で、その仕組みを成り立たせるための労力や、安全・安定的な水道水の供給によって社会が成り立っているという理解にまで到達させることが、ある程度できたとと言えるだろう。

「社会の仕組みを知る」ということは、今回の授業実践で、多くの児童に理解させることができたことと評価できるが、「社会問題の認識」においては課題が残る結果となった。水道管の老朽化が招く諸問題を書くことができていた児童は見られた。しかし、前項の図2のように、老朽化が問題となっている原因として修繕のためのコストを賄えないという財政難があるというところまで表現できた児童は、そう多くはなかった。なおかつ、財政難の背景にある人口問題まで結び

つけて振り返りを書いていた児童は、見られなかった。この「社会問題の認識」については、水道水の供給に関する問題に、「老朽化」があるということはどの児童も認識しており、それが及ぼす影響も理解することができていた。この点から、「問題の認識」そのものはある程度達成できたと評価できるだろう。しかし、老朽化の問題を、その背景にある他の社会問題と結びつけて、重層的に把握することは、十分に達成できたとは言い難い。ここが今回の授業実践の反省点の1つであった。

以上を踏まえて、「批判的な社会認識」について考えていく。今回の授業実践を通して、児童は現状の仕組みについて認識し、その仕組みにまつわる問題を把握した。そしてその問題に対して、「解決しなければならない」という意識を持たせることができた。つまり、児童が社会に対して批判的に見る、という授業実践の当初の目的については、ある程度達成できたとと言えるだろう。ただし、社会問題の認識は、より重層化することができると考えられるだけに、それに応じて批判的な社会認識もさらに深められる可能性が残されている。

水道管の老朽化と、他の社会問題とを結びつけていくための授業を行っていくためには、今回の授業時数では足りず、より時間をかけて行っていく必要があったことが、反省として挙げられる。水道管の老朽化が起きている背景にある、少子高齢化やそれに関わる自治体の財政難といった、他の社会問題が存在していることを、より時間をかけて理解させるべきであった。

さらに、批判的な社会認識をもとにして、どのような社会が理想であるかを考えさせることが、「変えることができる」という意欲を持たせるために重要であるが、今回の授業実践では実施することができなかった。この点も課題として考えていく。

現状の社会にある問題を把握させた上で、理想の社会を構想させるような授業では、先行実践で挙げた澁谷の実践で用いられていた「未来洞察」の考えが有用であろう。水道管の老朽化や、それに関わる社会問題を見た後に、「どのように水道管の老朽化問題が解決されることが理想であるか」を考える。ここで挙げられる方策には、技術革新や、税金の増収などがあるだろう。このような方策を考えた後、自分には何が出来るかを考えていく。このような授業が構想されるだろう。

9. おわりに：課題と展望

今回の課題研究では、批判的な社会認識から、今の社会に対して希望を持って行動できる力を身につけさせることについて検討してきた。

本研究の成果は、第1に、先行研究の検討から、社会問題について考えさせる授業に必要な要素を明らかにし、それに基づいて実際に授業実践を行った点である。現状の社会の仕組みを理解させることにあたっては、社会の様々な側面を知り社会を認識した上で、その問題の所在を明確にす

ることが必要である。この要素をもとに実践を行った結果、水道水の供給における社会の仕組みや問題について、ある程度理解させることができた。

第2に、社会科における「希望」とはどのようなものであるかを位置付けることができた点である。「希望」という言葉は漠然とした意味であるが、社会科、ひいては教育において、社会問題に対して批判的に捉えた上で、自分の理想を考える「批判的な希望」が必要であることを明らかにした。批判的に見ることで、現状の社会に何が不足しているのかを理解できるようになり、不足していることを把握した上で、どのように行動するかを考えていくことにつながっていく。

前節挙げた課題として、老朽化の問題と他の社会問題を結びつけて考えることや、批判的に認識したところから、「変えることができる」という意志を持たせることについて、達成状況が不十分であるということ挙げた。

この課題は、水道水の授業では教える内容が多く、学習指導要領の目標も達成しなければならないことからくるものであり、今回の授業実践では、現状の仕組みの認識や、問題の把握に着目した授業を行った。そのため、老朽化という問題と他の社会問題を結びつけるための授業を、限られた時間の中でどう扱っていくかについて、より検討を重ねていく必要がある。また「どのような社会であれば理想であるか」を考える授業の構想や、児童に「変えることができる」という意志を持たせる授業についてのより詳しい構想も、本研究に残された課題である。

また、今回の授業実践では、水道水の供給の授業を行ったが、授業内容や発達段階を省みると、上記の内容は少々難しいと思われるところもあった。特に、水道管の老朽化にあたって、自分たちができることを考える際、中々自分たちにできることが挙げられないことが想定される。そのため、この課題について行う際の授業内容の精選を行い、どのような内容であれば、児童が自分たちに何ができるかを考えさせやすいか、を検討することも今後の展望としたい。

【謝辞】

本研究に際して埼玉大学教育学部附属小学校の教職員・生徒、及び指導教員の方々にご尽力を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

《注及び引用・参考文献》

- 1) 日本財団 「18 歳意識調査 『第 20 回 -社会や国に対する意識調査-要約版』」 2019 年
- 2) 子ども家庭庁 「我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査（令和 5 年度版）」 2024 年
- 3) 文部科学省 「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）」 2018 年
- 4) パウロ・フレイレ 里見実訳 『希望の教育学』 2001 年初版 p. 8
- 5) 同上 p. 8

- 6) 同上 p. 33
- 7) 池野範男 (1999) 「批判主義の社会科」 全国社会科教育学会 『社会科研究』 第 50 号 pp. 61-70
- 8) 唐木清志 「未来を創る子どもたちと社会科授業」 唐木清志編著 『「公民的資質」とは何か』 所収 東洋館出版社 2016 年初版
- 9) 吉元輝幸 「小学校社会科における社会的判断力の育成—社会機能の批判的考察を手がかりとして—」 全国社会科教育学会 『社会科研究』 第 6 号 2008 年 pp. 51-60
- 10) 澁谷友和 「小学校社会科未来洞察型授業の開発—希望の未来像を描くシナリオ作成に着目して—」 社会系教科教育学会 『社会系教科教育学研究』 第 32 号 2020 年 pp. 41-50
- 11) 末永琢也 「社会インフラ問題の合意形成プロセスに着目した小学校社会科授業開発— 第 4 学年単元「ごみから見える社会」を事例として—」 社会系教科教育学会 『社会系教科教育学研究』 第 33 号 2021 年 pp. 21-30
- 12) 前掲書 3) p. 50